

# 再び「御書新目録」の著者に就いて

山 川 智 應

盛著の頃から、師子王文庫樓上の閑室に病臥して、九月初め稍快方に向つたので、文庫所藏の典籍中、正中山歴代に就いて記載せるものを搜して貰つたら、寛文十年版の「法華宗派」と、玉澤の秘書で、境持院日通師の未定稿なる「末法宗派私記」と、明治三十六年出版の、石倉翠葉著「日蓮宗各本山名所圖會」との三本を得た。石倉といふ人は局外者だが、各山に就いて相當に記録を捜査して登載してゐる。ことに中山の如きは、その法系の所では、中山の文獻をそのまま轉載してゐるらしいから、三本を一通り披覽して彼此對照すると、過般「法華」誌上に發表した「御書新目録」の著者について、聊か訂正せねばならぬところを見たから、九月五日試みに執筆したが、稿の半に至つて病體に可ならざるを以て中絶し、今や晩秋に入つて稿をつぐことを得たのである。(昭和七、十、三十一)

## 一、日貞師は「御書新目録」の著者に非ず

私は此の夏、或る人の問ひに答へて、「御書新目録」の著者は、中山日貞師であり、日廣といふ師の

著ではないこと。また若し中山の歴代に日奥といふ師がないことが確實ならば、行艸書で傳寫せられたる一本の『日貞』とあるのを見ると、或は中山中興十八世日貞師が、その著者ではないか。或は日奥師は改名又は除歴等で、中山歴世記録の中に、すぐには見えぬのではないか、などのことを陳べて置いた。

所で前稿の執筆當時は、座右に中山歴世に就いての、正確な文献を持たなかつたから、その旨をも明にして以上の推測をして置いたのであつたが、今度、文庫の藏書中「津華宗派」「末法宗派私記」「日蓮宗各本山名所圖會」等を參看すると、「御書新目録」は、或は中山中興第十八世日貞師の著ではないかといふ擬案は、撤回せねばならぬ。

元來中山は、第十世の日佺上人の時に、幕府の宗教政策上の干渉を受け、中村日本寺に遷されてから、以後の寺主は、堺妙國寺、京都頂妙寺、同本法寺の三山貫首が輪番で當ることになり、その初めに妙國寺開山頂妙寺第三世の日琬上人が中興第一世となり、以下中興第何世と數へてゐた。(中る日佺上人の後に日典上人を第十一世と數へることもあつたが、正格には日佺師までを中興以前第十世とし、典師は除いて、中興第一世日琬師と來て、通算すると琬師が第十一世といふことになつてゐた旨を、境持院日通師も書いてゐるし、また石倉氏の「名所圖會」は、第十一世日典上人と書きながら、

『中山歴代譜には、贈十一世實は歴代除去也。此師御代靈寶悉紛失云云』と書いてゐる。

そこで中興第十八世の日貞師を「法華宗派」によつて調べると、頂妙寺の貫首で、慶安五年壬辰の寂としてあるし、頂妙寺の項には第十世に列名し、やはり寂年は一致してゐる。また「名所圖會」には、『第廿九世日貞上人、承應元壬辰(聖滅三七)九月六日寂、京都頂妙寺兼帶』とある。承應元年は即ち慶安五年九月廿八日改元だからこれも一致する。(たゞ第廿九世とあるのは、典師を第十一世に「名所圖會」が通算したから、中興第十八世の貞師が、廿八世とならないで、廿九世となつてゐるのである)。すると「新目錄」著作の貞享三年から、三十四年前の寂だから、中興第十八世日貞師著といふことは、問題にはならないのである。

そして貞享三年の生存者で、中山貫首となつた日貞といふ人も、日奥といふ人も、これ等三本にはともに見當らない。

たゞ中興第二十三世に、日延といふ人がある。この人は貞享三年から三年後の元祿二年の寂で、「名所圖會」には、『此の人は三ヶ寺の歴代に非る也。此の時先住日威上人と示合せて、永輪番式を破る。貝如別記云云と中山歴代譜にあり』とあるから、何等かの革新意見の所有者と見られる。革新意見の所有者でなければ、「録内目錄」の偽作を断定し、「新目錄」を作ることは出来ないから、或は此の人が

とも強て擬すれば考へられぬこともないが、延と貞とは音通だが、字體が全然異なるから、特に貞字を延字に換へたのでない限り、混同とは出来ない。

ここにおいて「日貞？、新目録」と書かれた寫本も、貞享三年生存の中山日貞師なしとすれば、何等の示唆をも與へないことになる。

中山歷世に日奥師なし、また當時日貞師なしとすると、「御書新目録」は、一體誰の著であるのかと、更に疑問を投せねばならなくなる。

## 一、「御書新目録」の著者は日奥師なり

ところが、最近に「法華」における予の前稿を見て、山中喜八君から、勇猛日魔師の弟子、慧誠といふ師の寫せる「御書新目録」の奥書を謄寫して、参考に送つて呉れられた。此の慧誠師の寫本は、今千葉の片岡隨喜氏の所有だそうだが、「境妙目録」「日諦目録」の寫本及び「祖書編集考」の板本と合冊せられてゐて、その第一紙に『釋氏慧誠』の白字が捺され、「新目録」奥書の妙師の文は、予が前稿に引用したる日明師の寫本のもとは大同で、たゞ『享保十六年』以下に、左のやうな小差があるに止まるといふことだ。

享保十六<sup>△</sup>年<sup>△</sup>五月中旬、延山裕師、從<sup>△</sup>武江<sup>△</sup>歸山之砌、當山有<sup>△</sup>寄宿<sup>△</sup>。爲<sup>△</sup>其謝禮<sup>△</sup>、同下旬登山。其時出<sup>△</sup>此一卷<sup>△</sup>、與<sup>△</sup>予曰、此是御書新目錄也。中山歷世日與之所<sup>△</sup>改篇<sup>△</sup>也。以書<sup>△</sup>寫之<sup>△</sup>矣。予頂戴來寫<sup>△</sup>之。留<sup>△</sup>後來<sup>△</sup>耳。

惠<sup>△</sup>光山長遠寺第廿二世<sup>△</sup>日妙

即ち日明本に比するに、『享保十六年』の年の字を<sup>△</sup>少き、『頂戴來』の下に『寫之』の二字が加はり、慧光山の上に『甲州鏡仲條』の五字を<sup>△</sup>少き、『第廿七世』が『第廿二世』となつてゐる相違である。

なほ慧誠本には、日明本にない左の二奥書があつて、その來歴を明にしてゐる。此一巻者、師妙上人以<sup>△</sup>眞筆<sup>△</sup>欽寫畢。

最末一紙半者、師上人私記

今寬延<sup>△</sup>庚午八月中<sup>△</sup>侘五日於<sup>△</sup>延嶠西谷草庵<sup>△</sup>、寫<sup>△</sup>之。

義衷日正

此新目錄一卷、先師日麿所藏也。今併<sup>△</sup>予所藏之祖書目錄、年序新目錄二書<sup>△</sup>、書<sup>△</sup>寫焉<sup>△</sup>、以便<sup>△</sup>後學<sup>△</sup>者也。

時嘉永元年<sup>△</sup>戊申臘月、於<sup>△</sup>霞谷稱心庵<sup>△</sup>、寫<sup>△</sup>之畢。

慧誠

これによると、慧誠本は、もと長遠寺日妙師の弟子義衷日正の寫せるものを、勇猛日麿師が所持して居て、麿師の弟子慧誠が、またそれを寫したものだといふことがわかる。そして慧誠本も日明本を寫せる泰堂本と同じく、全篇正楷を以て寫され、その著者については、明かに『中山歷世日奥之所改篇一也』と、身延の日裕師がいつたとあるから、『日奥』とは、或は日明師又は泰堂居士の傳寫の誤でないかとの疑問は、ここにハッキリ除去せられるわけである。そして斯うなつてみると、行艸書の寫本の『奥』字か、『貞』字かわからないといふ文字は、『奥』と讀まねばならぬことになる。

身延第卅四世見龍院日裕上人は、遠沾日享師に繼いで、正徳三年（聖滅四三三）から享保十七年（聖滅四五〇）まで在位二十年。元文二年（聖滅四五七）寂であるから、「新日録」の著されたる貞享三年（聖滅四〇五）は、おもふにその壯歳の時に當るから、『中山歷世日奥之所改篇一也』といふことに、十分信用を置いてよいことである。しかるに、日奥といふ師が、中山歷世中にないといふのは、いかにも奇怪なことといはねばならないのである。

### 三、中山歷世に日奥師ありや

本來ならば、かゝることは中山に就いて、その古文献を調査せねばならぬのだが、予の病餘の身に

はそれは出來ない。そこで手許の「名所圖會」に轉載せられたる中山歴代の記録によつて、一往歴世の上人達の中、「新目錄」の著はされたる貞享三年の生存者にして、身延裕師が寫本を妙師に與へたる享保十六年までに、中山貫首となつた人々を列擧して見ることにする。

- |                |      |               |   |
|----------------|------|---------------|---|
| 第三十四世 (中興二十三世) | 日廷上人 | 元祿二己巳年(聖滅四〇八) | 寂 |
| 第三十五世 (同第二十四世) | 日允上人 | 元祿壬申年(聖滅四二二)  | 寂 |
| 第三十六世 (同第二十五世) | 日意上人 | 元祿二己巳年(聖滅四〇八) | 寂 |
| 第三十八世 (同第二十七世) | 日秀上人 | 元祿四辛未年(聖滅四一〇) | 寂 |
| 第三十九世 (同第二十八世) | 日相上人 | 寶永二乙酉年(聖滅四二四) | 寂 |
| 第四十世 (同第二十九世)  | 日耀上人 | 元祿十丁丑年(聖滅四一七) | 寂 |
| 第四十三世 (同第三十二世) | 日述上人 | 正徳三癸巳年(聖滅四三二) | 寂 |
| 第四十四世 (同第三十三世) | 日匠上人 | 元祿二己巳年(聖滅四〇八) | 寂 |
| 第四十五世 (同第三十四世) | 日近上人 | 享保八癸卯年(聖滅四四二) | 寂 |
| 第四十六世 (同第三十五世) | 日要上人 | 寶永三丙戌年(聖滅四二五) | 寂 |
| 第四十七世 (同第三十六世) | 日潤上人 | 元祿四辛未年(聖滅四一〇) | 寂 |
| 第四十八世 (同第三十七世) | 日住上人 | 元祿三庚午年(聖滅四〇九) | 寂 |

- |               |      |                |   |
|---------------|------|----------------|---|
| 第四十九世（同第三十八世） | 日妙上人 | 寶永七庚寅年（聖滅四二九）  | 寂 |
| 第五十世（同第三十九世）  | 日嚴上人 | 寶永二乙酉年（聖滅四二四）  | 寂 |
| 第五十二世（同第四十一世） | 日怡上人 | 享保十七壬子年（聖滅四五二） | 寂 |
| 第五十三世（同第四十二世） | 日啓上人 | 享保十三戊申年（聖滅四四八） | 寂 |
| 第五十四世（同第四十三世） | 日豪上人 | 享保十六辛亥年（聖滅四五〇） | 寂 |
| 第五十五世（同第四十四世） | 日達上人 | 寶永五戊子年（聖滅四二八）  | 寂 |
| 第五十六世（同第四十五世） | 日等上人 | 享保十五庚戌年（聖滅四四九） | 寂 |
| 第五十七世（同第四十六世） | 日闕上人 | 享保七壬寅年（聖滅四四二）  | 寂 |
| 第五十八世（同第四十七世） | 日精上人 | 元文四己未年（聖滅四五八）  | 寂 |
| 第五十九世（同第四十八世） | 日禪上人 | 享保五庚子年（聖滅四三九）  | 寂 |
| 第六十世（同第四十九世）  | 日瑞上人 | 元文二丁巳年（聖滅四五六）  | 寂 |
| 第六十一世（同第五十世）  | 日充上人 | 元文二丁巳年（聖滅四五六）  | 寂 |
| 第六十二世（同第五十一世） | 日領上人 | 寶曆五乙亥年（聖滅四七四）  | 寂 |

「名所圖會」所載の中山法系に依ると、以上の二十六師が、享保十六年（聖滅四五〇）までに中山貫首となり、貞享三年（聖滅四〇五）に生存してゐたとおもはるゝ人達であるが、この中には奥といふ師はない。



併し該法系には、第三十八世日秀上人以前には、入山退山の年月が記されてゐないから、その歴世間に空位のアつた時日がわからないが、秀師以後はそれが記されてゐるから、空位の時日が明かである。それは左の通りになつてゐる。

第四十世	日耀上人	此間	十日
第四十一世	日完上人	此間	二ヶ月半
第四十二世	日純上人	此間	四日
第四十三世	日述上人	此間	四日
第四十四世	日匠上人	此間	十二日
第四十五世	日近上人	此間	十四日
第四十六世	日要上人	此間	廿五日
第四十七世	日潤上人	此間	一ヶ月半
第四十八世	日住上人	此間	七月廿一日
第四十九世	日妙上人	此間	不明
第五十世	日嚴上人	此間	不明

第五十九世 日禪上人

此間二ヶ月六日

第六十世 日瑞上人

この空位の中に、不受不施か何かの理由で除歴せられた師があつたかも知れぬとの想像を容るゝの餘地がないでもない。しかしその空位も一ヶ月半や二ヶ月半などは、その少時日の間に、除歴貫首があつたなどとは考へられぬ。たゞ四十八世と四十九世との中間の十ヶ月廿一日間には、或はさういふことがあつたかも知れぬ。といふのは、輪番貫首の中には、四十世日耀師の如き、病氣により半年で退山せる人もあり、四十四世日匠師は約一ヶ年、四十六世日要師は十一ヶ月半で退山してゐるなどの例もあるからである。

且つまた三十六世日意師から、四十八世日住師までの輪番順序は、頂妙寺、本法寺、妙國寺の次第で交代入山してゐる例だから、この十ヶ月廿一日の空位のある處、即ち本法寺日住師の次には、妙國寺の貫首が出るべき筈であるのに、そこに十ヶ月二十一日の空位が出来て後に、頂妙寺の日妙師が四十九世の輪番として擧げられてゐる。そこで此の空位の間に、或は妙國寺側の誰の師か出てゐたのではないかとの疑ひを容れる餘地もあるが、併し頂妙寺日妙師の次の第五十世は、前の順序の如く本法寺が出ずに、却て妙國寺の日嚴師が出て、その後四十七世までは、頂妙寺、妙國寺、本法寺の順

に改められ、更に五十八世から六十六世までは、再び、頂妙寺、本法寺、妙國寺の順に歸つてゐるの  
を見ると、四十八世日住師の次の空位のところは、或は當時妙國寺には四十九世に出る人がなくて、  
種々の事情から十ヶ月廿一日の空位が出来て、頂妙寺日妙師が四十九世に瑞世したのが事實であるか  
も知れぬ。それらは中山の記録を精査して明かにさるべきことであらう。

若しかくの如く、右の空位も除歴等の師がなかつたものとすれば、「御書新目録」の著者たる、見龍  
日裕師のいはゆる『中山歴世日奥』といふ師は、事實ないことになる。

だが、前記の如く「御書新目録」の著されたのは、裕師の壯年頃の事實だから、師が『中山の歴世  
日奥の改め篇する所』といつたことが、どうしても無根據の事とは考へられないように思はれる。

然るに、裕師が『中山歴世日奥』といつた享保十六年までに、中山の貫首となり、貞享三年に生存し  
てゐた人は、上記の如くで、この中に日奥といふ師はないのであるから、若しかの空位に人なしとす  
れば、改名の師があつたところでせねばならぬ。そして中山貫首たる人は、また頂妙寺、本法寺、妙國  
寺の三山の何れかの貫首であるから、これ等三山の歴代を調査するもよい。そして「法華宗派」「宗  
派私記」ともに、頂妙寺、本法寺の歴代を擧げてゐるが、日奥といふ師はない。堺妙國寺の歴代は、  
此の兩書に擧つてゐない。随つて日奥といふ師の有無共にいへない。

本來ならば、中山にも妙國寺にも照會して此の筆は把るべきであらうが、今は病間僅々の時間を利用しての事だから、たゞ思ひのまゝだけを記して、敢て宗史專攻家の參考に資しやうと思ふ。

因みに、予の舊著「本化聖典解題提要」の凡例には、日奥師を本行院として、本行日奥師と記してゐる。當時の原稿はあたかも大震災に際して散佚し、今何に依つて之を知つたかの記憶を喪失したのは、甚だ遺憾である。

なほ予の前稿を見ざる人の爲に一言する。「御書新目錄」は、かつて一如日重師等が疑問を投せる「録内目錄」に對し、五理由を舉げて之を僞書と決し、録内御書及び中山に眞筆存在せる御消息類を加へ、新に年序によりての、大聖人御著作目錄を作成したる最初の著書であつて、宗學史上注目するに足るものがある。而して此の書の著者は、本書のいづれにも署名してゐないが、「御書編集考」の勇猛日麿師は、中山日奥師の著としてゐる。然るに「日蓮宗章疏目錄」は、之を日廣といふ師の著として収録してある。そしてその理由は中山の歴代に日奥といふ師はないといふことであると傳聞する。しかし予の見たる「新目錄」は二本あつて、一本は「高祖遺文」の編者智英日明師の書寫せるものを、小川泰堂居士が謄寫したもので、正楷を以て記され、且つ奥書に甲州鏡中條長遠寺第廿七世日妙師が、「新目錄」を謄寫せる來歴、及び日廣師の「種々御振舞書」「星下書」「法印

祈雨書」の三書は、もと一書なる旨の意見などを記せる一文が加へられてゐる。此の一文によりて「新目録」は、身延の見龍院日裕師が中山歴世日奥の著なりと明かにいへたとある。他の一本はこの奥書のないもので、もと日蓮宗大學の藏書を傳寫したものだが、艸行書で書かれ、表紙には『日×新目録』とある。×は貞か奥か、いづれとも讀める文字である。そこで中山歴世に日奥師なく、改名の師もないとすれば、智英日明師又は泰堂居士の寫誤かもわからぬとして、中山に貞享三年の附近に日貞師ありやと考ふるに、中山寶藏の「常修院本尊聖教錄」及び「裕師本尊聖教錄」の裝幀修復を爲して、この奥書を記せる、中興十八世眞徳院日貞といふ師が、若し強年にして瑞世し、八十七歳位まで生存したとすれば、此の人は「新目録」の著者となり得るかも知れないとの擬案を前稿において出して置いたのである。然るにその後、中山歴代の記録に接したから、前稿の日貞師の擬案を撤回し、中山歴世日奥師の著とせる、身延裕師の言を鐵案として、更に後の研究を促がすものである。(病牀にて)